サーカスの風

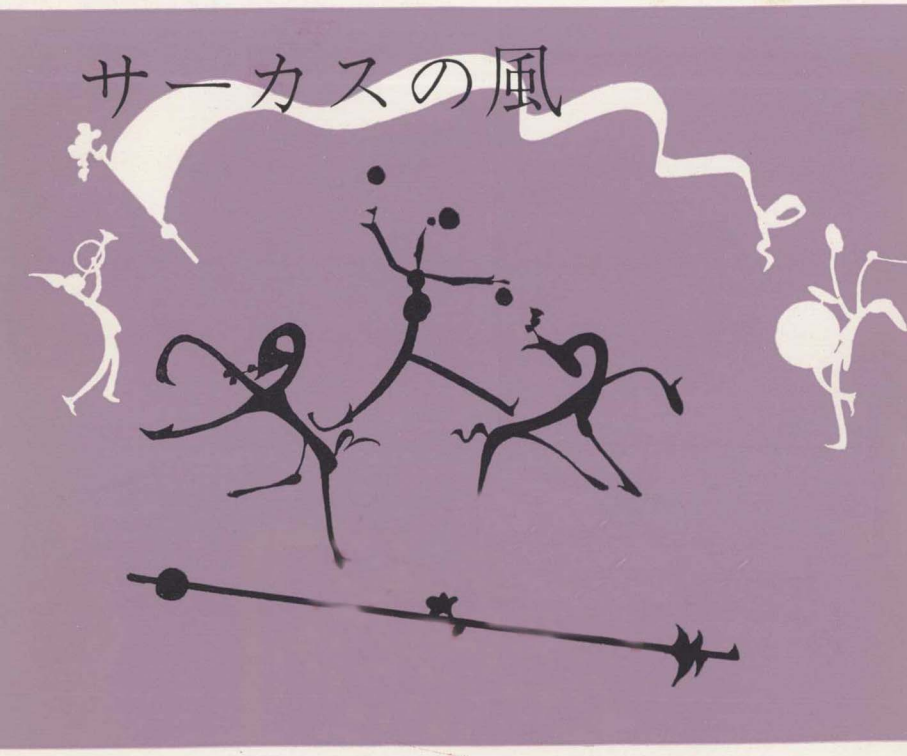
動物風土記

1

戸川幸夫

動物風王記（一）

サーカスの風



戸川幸夫

角川書店

サーカスの風　定価二九〇円

戸川幸夫

株式会社角川書店

角川源義

東京都千代田区富士見町二

振替東京一九五二〇八番

昭和三五年一〇月一〇日初版発行

暁印刷株式会社

宮田製本所

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

サーカスの風

目次

黒い海　七
七ひきの犬　一三
ライオンのネロ　一四
訓練　一四
サーカス見学　一六
ピエロのヨネサン　一七
飛び出す　一八
六つの玉　一〇〇
汗と涙　一一四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

運動会　一二七
爪　一四一
生と死の闘い　一五九
萌える力　一六九
手紙　一八一
階段　一九五
明るい海　二〇九
あとがき　二三〇

裝幀　初山滋

サーカスの風

――動物風土記(一)

黒い海

黒い色の海だった。

白い波頭が躍っている海だった。

太平洋側の明るい、のびやかな海からくらべると、日本海側の海は暗くて、荒々しい。

それだけにずっと続いた白い砂丘は美しかった。

砂丘は美しいが、年々けずりとられて後退してゆく。

「わたしらの子供のころは、いま船が通ってますね、あのあたりまでが砂浜でした。

わたしらは夏になると毎日のようにここへきて水泳ぎをしたり、相撲をとったりしたもんですが……。

こんな調子でゆくとあと十年もしたら砂浜はなくなるんではないでしょうかね」

観光客を案内して浜辺を訪れるハイヤーの運転手はこういってなげくのだ。

砂丘の海岸は北に伸びてどこまでも連なり、雲と水とが横の一線に溶けこむまで続いている。

海に対して汀の線をはさんで豊かな越後平野がひろがっていた。

平野には母なる大河——信濃川と阿賀野川——がゆったりと這いくねり、やがて黒い海に注いでいる。

そんなところに新潟市があった。

砂丘の背後は濃い緑の松林だった。強い海からの風に、松たちは背が低くねじ曲ってはいたが、ほかの土地の松には見られない根強い生命力を見せていた。

松林はだらだらとしたゆるやかな勾配を見せて上っている。

そして砂地の林が上りきったところに白いコンクリートの近代的な明るい建物があった。

そこから歌声が流れていた。

潮風荒らい日本海
きびしい試練にたえてよと
とどろ　とどろと鳴る音の
声聞き育つ　浜のぐみ
赤い実のなる浜のぐみ……

建物はまだ造られたばかりと見えてどこもかしこもま新しかった。

七月の太陽は強烈な光線を海や砂丘や松林と同じように、その白い建物にも投げかけ、まぶしい光の束をぎらぎらと反射させていた。

大まかにいって建物は二棟の長方形の、平行して建てられた平屋からでき上っていた。

歌声はその一棟の、松林に面した窓から静かに流れているのだった。

子供たちの声であった。だが、その歌はハーモニーがなかった。テンポものろく、歌詞もはっきりしない。一人一人が勝手に、ばらばらに歌っている——そんな歌い方だった。

そのとき建物の正面玄関、ポーチのところに一台のタクシーがすべりこんだ。

車のドアが開くと、一人の年配の婦人が降りた。

それからこの婦人の娘と思われる二十歳ぐらいの若い婦人が降りた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

婦人たちはまずボストン・バッグと旅行鞄を下ろした。それから娘の方が車に上半身を入れると、

「文平ちゃん、さあ」

と手をだした。

車の中にはもう一人いた。小学校五、六年ぐらいの少年だった。鼻すじの通った、眉のきりっとしまった、瞳の澄んだ利口そうな子供。ただ色が青白くて腺病質らしいひよわさが、この少年の人生が暗いものであることを示している。

少年は運転手と母親と姉とに援けられてやっと車から出ると、姉の背に負ぶさった。

彼の腰は痩せて、妙にいびつに曲っていた。そして足は、萎えきって、姉が歩くにつれて力なくぶらぶらと揺れた。

「うまく入学できるといいけどね……」

母は建物の玄関口に掲げられた看板を眺めて不安げに呟いた。

看板にはこう書かれてあった。

『新潟県立肢体不自由児施設　はまぐみ学園』

母親は明るい玄関にいくぶん気押された様子であった。はまぐみ学園——とは書いてあっても、玄関から受ける感じは近代的な病院だった。

母親は娘と、文平と呼ばれた少年を玄関に待たせて、おずおずと受付に近寄った。

「あのう入園の手続きはこちらでよろしいんでしょうか？」

受付にはこの老婦人の娘と同じ年ごろの娘がいた。

「どちらからいらっしゃいました？」

受付嬢はこの老婦人を気楽にさせようとほほえんで小首をかしげた。

「はい、佐渡の相川からまいりました。役場の御紹介がありましたもんで……」

母親は手提げから助役のハンコを押した書類と手紙と

を大事そうに取りだすと受付嬢の前に差し出した。
「ああ、多田文平さんですね。ええ、相川から連絡がきてます。きょうお着きになったんですか？」
「はい、ついさっき着いたばかりで、港からまっすぐにこちらにまいりました」
「このお手紙は園長先生への御紹介状ですね、あいにくと園長先生は新潟大学の方がお忙しいのできょうはお見えになる日でございませんけど……でも副園長先生がいらっしゃいますから……」
園長がいないと聞かされて母親は少しがっかりした様子だったが、
「ではなにぶんよろしくお願い申します」
とていねいに頭を下げた。
副園長は巡診中だったので母子は玄関の傍の待合室にしばらく待たされた。
廊下には曲りくねった白線がひかれてあった。それは歩行練習に使われるものに違いない。
廊下を松葉杖をついて小学三年生ぐらいの子供がやってきた。足をひきずるようにした不自由な歩き方だったが、それでも文平はその少年がうらやましかった。
歩けるということがここでは最初の、そして最大の目標だった。
歩く格好がどうだなんてことはささいな問題に過ぎない。
文平は青い顔をその少年に向けた。
歩けない少年から見られるということはその少年にとっては誇らしいに違いない。
コトリ　コトリ……松葉杖の音をさせて近づいてきた少年は、文平の前で立ち停ると、
「君、こんど入るの？」
と声をかけた。
文平よりは二つか三つ年下に違いないが、少年は先輩を意識しているらしく対等なものの言い方をした。文平

は黙ってうなずいた。
「ねえ、坊ちゃん」
母親がたずねた。
「お宅は新潟市？」
「ううん、長岡だよ」
「ああ長岡……いつ入園したんですか？」
「最初ンときからだよ」
「そのときは歩けたの？」
「少しね。ぼく、ここへきてから手術二回もしたんだ」
少年は自慢そうにいうとまたコトコトと音を立てて医務室の方へと歩いていった。
「しゅ……手術するの？」
文平はノドにからみついたような声で聞いた。おびえているようだった。
「なんだ文平ちゃん、手術がこわいの？」
姉が冷かすようにいった。
こわいもんかい——そう力みかえるはずの年ごろなのに文平はいじけたように伏目になった。
「大丈夫よ、あんな小さな子だって二回もしたんだもの。女の子だってしてるんでしょ……」
姉はさらに励ますように言葉をそえた。
「やあ、お待たせしました」
副園長の志田博士だった。色白で長身だった。副園長というからもっと年配の、でっぷりと肥った紳士を勝手に頭の中にこしらえ上げていた母親は、その若さにあっけにとられたように立ち上った。
「私が志田です。佐渡の児童相談所から連絡があったのでお待ちしていました。それで診察いたしますまえに一応了承しておいていただかねばならないことをお話しいたします」
副園長は眼鏡をキラリとつめたく光らせて、きわめて事務的にいった。情をうつしては後から辛いから決定まで機械的に処理してゆこうというようにみえた。

母親がていねいに頭をさげてなにぶんよろしくお願いします、とくどくどと頼むのにも副園長はあっさりうなずいて、

「ま、こちらにお入り下さい」

と先に立った。

看護婦が手押車を運んできた。文平はひとからじろじろと見られているような気がして恥かしかった。

いままでは家のものだけの瞳が、自分の不自由な足腰をいたわるように包んでくれていたが、ここではちがった。

「あの子もそうなんだ、立てないんだ」

そういった冷たさをふくんでいるように思えた。文平は診療室に運ばれる途中ずっとうつむいていた。

診療室は明るかった。部屋のすみで看護婦さんと三歳ぐらいの女の子とが遊んでいた。女の子は起きあがれないらしくマットの上に寝ころんで、看護婦さんの指をつかもうとしてキャッキャッと笑っていた。うまくつかめないのがおかしいらしい。

そんなありさまを文平は手押車の上からぼんやりと眺めていた。

「お母さん、それからお姉さんですか？　まアそこにおかけ下さい」

そういって志田副園長は文平の傍により、

「さア、ベッドに移ってズボンをとってごらん」

といった。

ズボンを脱げ、といわれても文平には出来ないことだった。家にいれば母か姉がしてくれたのだ。文平は急に悲しくなって涙がにじんできた。

看護婦が手伝って診療ベッドにうつむきに寝かしたとき、文平は耐えられなくなって息をころして泣きはじめた。

「ねえ君、君の名前は？」

志田副園長は腹ばいになった文平をのぞきこむように

してたずねた。
「……」
「名前は？」
「……」
「名前をいってごらん」
「名前は多田……」
母親が口をだしかけた。それを婦長の吉川かの子が片手でとめた。本人に答えさせるためですよ、とその目はいっている。
それでも文平は頑強に黙っていた。
「文平ちゃん、名前いうのよ、先生に……」
姉の芳江がしかるような強い口調で言葉をそえた。
「ふ、文平です」
文平はやっとかすかに答えた。
「文平は名前だね、姓は？」
「多田です。多田文平」
「多田文平君か……なるほどここだね」
志田副園長はいびつに曲った腰から、やせたもも、固くなった筋肉やすじを丹念にさわって診ていたが、
「君、自分ひとりで動きたいときは這ってゆくんだね」
這って歩く——といわれることは文平にはとてもいやで、悲しい、つらいものだった。かあっと顔が赤くなると文平はそのまま黙った。
「這えるということは、治療して、努力さえすれば立って歩けるということのはじまりなんだからね。
この学園にはね、這うことも、自分で御飯を口に入れられない子もたくさんいるンだよ」
「先生、その人たちもよくなるんですか？」
そう質問したのは母親だった。悲しそうだったその瞳には明るい希望の灯が点じられていきいきと輝きだしていた。
「よくなりますとも……といってもそれは程度問題ですがね」
志田副園長はまくりあげたズボンを文平の腰にかけて

やりながらふりむいた。

「お母さん、こちらにおいで下さい」

志田副園長は自分の事務机にもどると、その前に置かれた面接用の椅子を母親のよね子にすすめてゆっくりと喋りだした。

「もっとくわしく診察をしませんと決定はできませんがいま拝見したところでは治療と機能訓練によってある程度の障害は克服できると思いますが、問題はすこし治療の時期が遅すぎた憾みがあります。

もう四年生ですか？」

「いえ、五年生です。すみません」

よね子は申しわけなさそうに頭をさげた。

「五年生ですか……。お子さんはたしか……」

そういいかけて副園長はカルテ（病症録）に眼をとおした。

「ああ、三歳で発病でしたね。どうしていままでに診断をお受けにならなかったんですかねえ」

「はい、佐渡でお医者さまに診ていただきましたけど……まだこれの小いさいときに……」

「それで？」

「先生は小児麻痺だからどうにもならないといわれるもんで……神仏に願ったりしましたがだめでした」

「いやわかりました。過去のことを追求してもしかたがありませんからお聞きしますまい。

で、まア治療はあきらめていられたわけですね」

「はい……。教育だけは家庭教師のかたを頼んでやらせていました。そしたら姉がこちらのことを聞いてまいりまして……」

「ひとくちに小児麻痺と申しますが、いろいろありましてね、ざっと大別しますと脳をおかされたためになる脳性麻痺、脊髄をやられたのが原因の脊髄性麻痺、骨関節結核によるもの、脊椎カリエスによるもの、このほかまだありますが、文平君のは脊髄性麻痺なんです。このこ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.